

蓮華君の不幸な夏休み3

海原育人

Ikuto Unabara

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画　しまどりる

プロローグ	9
第一章	16
第二章	48
第三章	90
第四章	126
第五章	158
エピローグ	200
あとがき	207

蓮華君の不幸な夏休み3



物
ブツ

紹
シヤウ

介
カイ

建世時人

大赤
地間

十 十 三 十 三



"TSUBAME"

七海那美

レインゲハルヒサ

不幸な夏休み 3
フコウ ナ ナツ ヤス ミ サン

登
トウ

場
ジヤウ

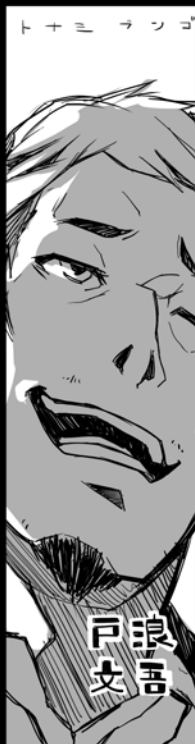
人
ジン



佐藤 歩
サトウ アユ



古ノ 秋乃
コノ アキノ



トナミ ランゴ

戸浪 吾
トナミ ゴ



リタリ ショウコ

巨理 翔子
リタリ ショウコ

蓮
レン

華
ハ

君
キミ

の



And
more!



プロローグ

片付けをな、することになったんだ。俺一人でだ。点数稼ぎって奴だよ。ちよつとでも明日香の機嫌を取ろうと思った。何せあれだ、俺は戦闘じゃ何の役にも立たなかったからな。

戦わなかったのかって？

戦おうとはしたさ。けど手を出す前に終わってた。あつと言う間ってのはああいうことを言うんだろ。な。片っ端から殺されてったよ。あつと言う間に十二人が死体に変えられた。あつという間に店が血の海に変わった。俺は……見てただけだった。

だからさ。せめて後片付けくらいはって思ったんだ。よ。気の利く男だつてのを分かってもらいたくてな。

けど、作業を始めてすぐ後悔した。

隣に明日香が居た時は気を張れてたんだろうな。けど、一人になった途端、耐えられなくなった。十二人分の死体。何処を見ても血に汚れた店。すぐに我慢の限界が来た。

おまけに、死んでるのは昔の同僚だ。

顔も名前も知ってる。喋ったことなんか数え切れないくらいある。一緒に酒を飲んだ奴も居る。近場に旅行に行ったこともある。そういう奴等が、全員俺の前で死んでるんだ。

片付けなんか買つて出るんじゃないか。そう思った。何回も吐いたよ。気持ち悪いやら哀れやらで。歯止めが利かなかった。吐いてへろへろになつて、また後悔して、その繰り返しだ。

なら最初から裏切るなつて？

そりゃ、俺だって悩んださ。会社を裏切つて明日香に味方すれば、同僚たちが敵に回る。連中と戦わなきゃいけない。何より大手製薬会社の社員つ

ていう、得難い立場を捨てることになるしな。そりや悩んだ。

けど、やっぱり明日香なんだ。あいつじゃなきや駄目なんだ。

おい、もつと違う言い方があるだろう。せめて愛情って言ってくれ。

あ？ とつとと本題に入れ？ ああ俺だつてとつととそれを喋りたいさ。けど、状況の説明は要るだろう。分かってもらえたか？

日時は八月十三日の午後九時前後。場所はタトゥショップ『ホットワックス』。明日香は先に帰って店には俺と死体だけ。

その状況で、俺は鍵堂に襲われたんだ。

死んだ振り。そう思った。さすが鍵堂さん。そうも思った。良い根性だつてな。

そう思って……おい、いきなり話の腰を折るなよ。どんな人かぐらい後で亘理に訊け、今は。……ああ

くそ分かったよ。説明すりゃ良いんだろう。

鍵堂顕作。三十二歳。鍵堂班の班長だった。契約対象はハンマー。射程は大体七メートルくらい。その範囲内の物体を叩き壊すつて力だ。まあ、ぱつとしない力だよ。シンプルで、そして地味だ。応用の幅も大して無い。けど、強かった。生真面目な人でおまけに面倒見も良かったから人望もあった。ま、そうでなくちゃ明日香を捕まえるなんていう大事な仕事は任されないだろうけどな。……こんなところだ。満足か？

んあ？ 見た目？ それこそどうだつて。ああもう、分かったよ。喋る。

渋いおっさんだよ。最近は四十だつて若く見えてるつてことを考えりゃ、老け顔の部類だろうな。身長は百七十台の後半だ。百八十には届いてなかったと思う。体型は、どうだろうな。太っちゃいないが瘦せてもいない。がつしりした体してたよ。短髪で、こう、もみあげと顎髭がくっついてたな。ああ、口

髭は生やしてない。顎鬚^{ひげ}だけだ。こんなもんで良いか？

で、話を戻すとだ。

その時俺は五体目を袋詰めにしてた最中だった。もう何回吐いたか分からないくらいになって、目は真っ赤だったし、鼻はぐずぐず。朝までかかっても終わらないかもしれないとか、体は精一杯綺麗^{きれい}にして埋葬してやるからなとか、そんなことを考えてた。

そしたら、背後に人の気配を感じた。

そう、鍵堂さんだ。で、死んだ振りだと、そう思ったんだ。さすが鍵堂さん。良い根性だ。そんなことも思って、そしてもう一つ。

ラッキーだとも思った。

先の戦闘じゃ良いとこ無し、点数稼ぎに片付けをやってる俺の前に、絶好の手柄^{てがみ}って奴が現れてくれたんだ。そりゃあ嬉しかったよ。……さっきまで死んだことを哀れんでたくせにな。勝手なもんだ、

ほんと。

って、またか。今度は何だ。あ？ 何で逃げなかったのかって？ そりゃ、勝てるど踏んだからさ。

確かにあつちは経験豊富な歴戦^{れきせん}の男。対する俺は、力を手に入れてたとはいえ、運動不足の研究員だ。お互い万全の状態でかち合ったらあつさり負けるだろうな。けど、あの時鍵堂さんは手負いだった……手負いだと思い込んでたからな。そりゃ勝てるって思うだろう。死んだ振りをしなくちゃいけないほど追い詰められてる鍵堂顕作だぞ。充分勝てると思うさ。

ま、大間違いだったわけだけどな。

戦うつもりで、目の前に転がってる勝ちを拾うつもりで、大喜びで内ポケットに手をつ突っ込んだよ。突っ込んで、釘を引っ張り出して、撃とうと思ったま、さすがにそれだけで終わると思ってたなかったけどな。様子見の一手だ。それで鍵堂さんの体の具

合を把握しようって肚^{はら}だ。

けど、撃てなかった。

撃とうとしたらいきなり鍵堂さんが四つん這いになつたんだよ。それにびっくりして、いや、四つん這いとは違うな、どっちかって言ったらクラウチングスタートだ。あんな感じに、床に手を突いて、尻を突き上げて、それから。

唸^うつたんだ。

唸^うつたんだよ。歯を剥^むいてな。威嚇^{いかく}してる犬と同じだ。良い歳した大人が、いやそもそも、人間がやるようなことじゃない。

で、こっちはこっちで何が何だか分からないから、軽いパニックだ。鍵堂さんが何をやってるのか、何を狙^{ねら}ってるのかってのを大真面目に考えて、疑^うって、可能性をずらずら頭に並べて必死で自分を落^おち着^きかせてた。

で、そんなことを考えてるうちに、こっちに突っ込んで来た。速^{すみ}かったよ。とんでもなく速^{すみ}かった。あ

の時は五メートルくらい離れてたと思うんだがな。瞬^{しゅん}きしたらもう目の前に居た。我ながらよく迎撃^{ようげき}が間に合^あったと思うよ。

ん？ ああいや、釘^{くわい}を撃^うつたんじゃない。さつきお前にやったことだ。体ごと吹き飛ばした。吹き飛ばして壁^{かべ}にぶつけた。

ま、勝^かつたと思^{おも}つたよ。この店とは違^{ちが}って『ホツトワックス』はコンクリートの打ちっ放^{はな}しだからな。そんなものに高速で叩^{たた}き付けられれば、普通は死ぬ普通はな。

……ああその通りだ。死^しななかつた。

平然^{へいぜん}と起き上がって、で、また例^{れい}の姿勢^{しせい}で、また唸^うって、また飛び掛^かかってくる。喋^{しゃ}りかけても無^む反応^{はんぷう}。また弾^{だん}き返^{かへ}して、また壁^{かべ}にぶつけて、そしてまた起き上がる。その繰^{くり}り返^{かへ}しだ。

で、繰^{くり}り返^{かへ}すうちに段々^{だんだん}分^わか^かつてきた。

こいつはもう人^{ひと}じゃない、獣^{けもの}なんだってな。何がどうなつてそんなことになったのか全く分^わからな



ったが、それだけは確信出来た。そして確信出来た瞬間、悟ったよ。

こいつは俺を食おうとしてるつてな。

冗談に聞こえるか？ まあそう思うんならそれでも良いさ。けど俺はそう確信した。こいつは獣だつてな。

そして獣が戦うのは、身を守る時縄張りを侵された時^{つが}番う相手を争う時、そして、食い物が絡んだ時だ。俺はあいつに、間違いなく餌だと思われてた。

……堪^{たま}らなく怖かったよ。

だから必死になった。点数稼ぎだの手柄^てだのが頭から消えて無くなつて、残ったのは兎^とに角生^{かく}き残る。これだけだ。だから必死で弾き返し続けた。

十分。五分。いや、実際はもっと短かったのかもな。俺の体感じゃ二十分くらい続けてたと思うんだが、苦痛な時間つてのは長く感じられるからな。ともかく延々弾き返し続けてたら、いい加減諦めたらしくてな。

戸口から出てつたよ。四足歩行でな。

は？ 捕まえられるわけないだろう。こっちはとつくに腰砕けだ。そんな気すら起こらなかった。

ん？ その後？ その後は片付けを続けたさ。それが元々の仕事だったからな。本音を言えば帰りたいけど、片付けないまま帰ったら点数稼ぎもクソも無い。だからまあ、戸締まりだけはきっちりして、警戒しながら片付けを続け……何？ そういう意味じゃない？ じゃどういう、ああ、明日香か。そんなの、報告出来るわけないだろう。

何でつて、話聞いてたか？ 点数稼ぎつて言つただろう。後片付けも満足にこなせないような無能だと思われるのは、それは、その、駄目だろう、色々だから明日香には何も言つて無い。ただ綺麗に片付けた『ホットワックス』を見せただけだ。

ともかくだ。俺が知ってることはこれで全部だ。全部喋つた。今度はそっちの番だ。俺の疑問に答え

てくれ。鍵堂に何が起こった。何が起こってあいつはあんな化け物になった。何か知ってるんだろう？
って、おい、そりゃ無いだろう。これだけ喋らせ
て、ちよ、拳つ、ちよ、おいつ、まっ、待あっ！

第一章

九月八日。午後四時。

「考えてみりや当然だったな」

愛飲しているマルボロを啜^むえながら言うと、俺に釣られたのか、亘^{わた}理もハイライトを取り出しながら、「あ、ビーフシチュー食べたい」と言った。

タトウシヨップ『レディメイド』の隅っこに用意された、待合スペースである。

元はカラオケボックスだった建物をリフォームして使っているとかで、今居る場所も元は個室だった場所らしく、背の低いテーブルを中央に、それをぐるりと取り囲むようにこれまた背の低い椅子が配さ

れている。

「わあお、会話がまるで噛みあってねえ。最高だな。うっかり惚^ほれちまいそうだ」

「前作ってくれたのあったでしょ？ あれまた食べたいわ」

いまいち思い出せず、

「そんなん作ったっけ？」

と首を傾げていると、作ったぞ、とツバメの声が頭の中で反響した。

『あれは確か、亘^{わた}理に説教をくれた日だ。牛タンのシチューだった。ガーリックトーストとパンナ・コッタを一緒に出していた』

「ああ。そういや作ったなパンナ・コッタ。あれは良く出来てた。美味^{うまい}かった」

「ちよつと固くなかった？」

「あれぐらいが良いんだ。食い応えがある」

「もうちよつと柔らかかったら文句無かったわ。で、どうなのビーフシチュー」

「作ったのを覚えてないってことは、技術通りの出来だったってことだ。可も無く不可も無くだ」

「そうじゃなくて、食べたって言うてるの」

「作ってくれて一言が未だに出て来ないのが不思議でしょうがねえよ。一体いつまで待たせる気だ？」

「空気を読んで察するっていうのが大人の嗜みだと思ってたわ」

「親しき仲にも礼儀ありって言葉をお返ししよう」

「衣食が足りてないから礼節も知らないの。ごめんなさいね」

は、と鼻で笑ってやると、巨理は馬鹿にしたような微笑で応じ、それから表情を改めて、

「君と同じ力、か」

と先の俺の言葉によく応じた。

「そうよねえ。あっちも君と契約してるわけだから、当然そうなるわよね」

「で、現在はどういうわけかケダモノだ。どういう冗談だ」

「こっちが説明してもらいたいくらいよ。現象としては、中身が君に移っちゃったから、ってことなんでしょうけど、もう正直何が何やら」

「同感だ。意味が分からねえ」

「そもそも契約が成立してるってこと自体が意味不明よね。宗像むなかたさんの話を聞いた上で状況を整理すると、鍵堂かぎどうさんが死んで」

「生きてたろ」

「話の腰を折らないの。私の手持ちの情報っていうか、私がルールだと規定してるものに則のっとって整理してるんだから。文句は後回し」

「へーへー」

「姉さんに返り討ちにあつて死亡し、鍵堂さんの契約が破棄される。そこに保管されていたと思われる君の血液、あるいは体毛が付着。この時点で君との契約が成立する。肉体の損傷を瞬く間に再生する、

という力の特性が働いて、肉体がみるみる修復され、勢い余って止まっていた心臓まで動き出した、つてとこかしら。死にたてだったのが幸いしたつてと？」

勢い余ってか、と笑った。

「笑うところじゃないでしょ。こっちは真面目に」「考えたつて埒明^{らちあ}かないし、もつと言や、足しになることでもないからな。正直^{まじ}どうでも良い。そういうわけだ。違う話で宜しく」

可愛げの無いことで、と亘理は詰まらなそうに応じ、その後煙草に手を伸ばした。

視線を宙に彷徨^{さまよ}わせつつ煙を吐く。と、そのうちにあれこれと考えを巡らせたようで、

「ああ、でも、そうか。これでツバメがプロジェクトの内情に明るかった理由がはつきりしたつてことよね。何せ鍵堂さんなん」

亘理はそこで言葉を切った。

「どした？」

「……私のこと、覚えてないのかしら？」

「だそうだよ」

『人間関係は全滅だな。日下部^{くさかべ}の情報が断片的に出てくるくらいで、他は全くだ。そもそも自分のことも出て来ない』

ツバメの言葉をそのまま伝えると、そう、と亘理は難しい顔を作つて、

「ツバメは鍵堂さんじゃない、つて可能性はどうなの？」

と言葉を継いだ。

「どういう脈絡だ？」

「私のことを知らない。桃ちゃんも芦部^{あしべ}君のことも知らなかった。自分のことも分からない。ま、その辺りからかしら」

「苦しい仮説だな。状況から見てツバメが鍵堂の身だつてのは間違いないね」

「宗像さんが真実を述べてる、つて前提が必要になるけど」

言つて亘理はフロアに視線を投げた。その視線を辿ると、気持ち良きうつ伏せになっている宗像が目に入る。

縛り上げるべきでは、という意見がツバメから出されたが、何で縛ろうが力を使えば脱出出来るだろうし、そもそも用済みの男である。逃げられようが痛くも痒くも無いし、何か企もうにも戦力の差は歴然。そういうわけでそのまま転がしてあつた。

「けどま、真実を話したつて見て良いかしらね。姉さんに黙つてたつて辺りにリアリティを感じるし」

「同感だ」

『同じく』

「でも、宗像さんの話が真実だつてことになる、鍵堂さんが宗像さんを食べようとしてたつてのが、ちよつと嫌な感じなんだけど」

「ああそれなー、気持ち悪いよなー」

「いやいやいやいや、気持ち悪いとかそういうことじゃ、まあ確かに気持ち悪いけど、そういう意味じ

やなくて、もしそれが本当なら、人が餌に見える不死身の肉食獣が、今現在も街をうろついてるってことになるんじゃないの？」

「そうなるな。それで、犠牲者は多分もう出てる」

『だろ、な』

ツバメの口調はひたすらに苦かつた。亘理は想像して気分が悪くなつたのか、眉間に皺を寄せつつ煙草をせわしなく押し付けて消した。

「出てる、かしら？」

「樂觀的に考えるのが好みならそうしろよ。けど、悪い材料なら幾らもあるぞ。鍵堂がケダモノに成り下がつたのはもう一ヶ月近くも前だ。腹が空いたところに都合良く人間以外の食い物が転がってて、そういう偶然が一ヶ月近く続く、なんてことは無いだろうよ」

無いわね、と亘理はツバメに劣らないほどの苦い口調で応じてから、

「……堪らないわね」

と続けた。

「ああ。洒落しゃれになつてねえ」

応じると、いい加減「人食い」の話題を続けることが嫌になったのか、亘理は大きく息を吐いてから、
 そういえば、と話題を変えた。

「鍵堂さん、生きてたわね」

「さつきもそう言つたら」

「いやほら、前に話したじゃない。君が契約したのは死体だとかどうとか」

「ああ、そういやしたな」

「私は死体説を推してたけど、君は生きてる可能性を最後まで捨てなかった」

「俺が生きてることを期待してたみたいに聞こえるぞ。違う。俺だって死体を期待してた。そのほうが話が早かったからな。けど、お陰で期待外れだ。話が面倒くさくなつた」

力を完全に捨てる、完全に普通の人間に戻るためには、契約対象を破壊する必要があるらしい。

タトウを消しただけでも力は使えなくなるのだが、俺の場合、それでツバメがどうなるか全くの未知数。最悪、俺の中に残ったまま、ということすらあり得る。

つまり、より確実に行こうと思えば契約対象を、鍵堂を殺す必要が出てくるわけだが。

出来れば避けたい事態だった。

これ以上手を汚すのは御免だ。

「どうする気？」

「そりゃ勿論もちろん、決断をぎりぎりまで先延ばしにする。それ以外の解決方法をぎりぎりまで探る。それと平行して、鍵堂の確保に動く」

『そうしてもらえるとありがたい』

俺に氣を使つたのか、ツバメは何の感情も籠こめず、素っ気無く言つた。が、亘理は、

「今のうちに決断しておくことをお勧めするわ。何なら、私が代わりにやつても良い」

反射的に鼻で笑つた。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。